孺倉見聞志

十六
十七

へ 遠13
2475
16

門へ函3
請2475
巻16

公文雜纂

續古見聞誌卷之拾六

月條

一　南蛮太郎橋系將と相戰事

一　南蛮將軍の家臣のまた思事

一　南蛮太郎生擒事

[illegible]

[illegible]人家軍記巻之拾六

一 南蛮太郎殿 生駒[illegible]年

[illegible]人と称へ[illegible]

[illegible]

一 南蛮将軍の[illegible]

[illegible]年

心果敢くして比叡山の僧徒と
ふたりの角ふ振りて、寄手の石塔を
わりたてまつれども日月浮雲ふ
なびく梶原平三景時ぐしたてまつり
ぐしたてまつりて山門の蔵ごの
半ばに京時ぐ人ぐ言ふ上ぐ
知らるふ東海ふ所ふ流さるる平三
京時ぐ三男景茂の平太

しるしの紙ぐ書きて立てて
らるる事ぐ行ひたる蔵ごの
ぐ知らるる人ぐ多くの蔵ごの
知らるる人ぐの屋ぐ
ぐとて法ぐ紙文の
紙ぐ書きて蔵ごの目ぐ
源の一つ成ぐ
ぐて蔵ごの

大しふ路とちゆりてくだりてせんこ
の浦ゝより伝く将軍がゝ新しいうん
せきとうの人（唐元四ゆく大の物
と庵ごのゝ方（芭蕉翁ゝせのゝ花
頼郷ゝうこびはりなりこうの人
ごもこうこ春四ゝこがなりこ伝く
ゝとやうんせくこうこ年いうこび
ちごくこ春ゝと伝ゝ時ゝ

新勢公屋元のゝ系ふこび郎人のる
ふゝゝ庵ゝの知はのゝゝゆゝ伝ゝのゝ
ごも庵ごの知はのゝゝゆゝ伝ゝのゝ
ゝ杉ゝにくゝのゝ伝ゝもなゝゝ
ゝゝゝのゝ東ごゝゝうこび命者の
ゝゝゝふゝゝと雑食ゝゝも
あんゝゝ年ゝゝゝこびゝふゝゝのゝ
元とうくこゝゝに高舞ゝゝ年ゝ武

行人は少将とのぼりしがきよはりのむすめ
主人へ蒲原の将軍の公女中にてふみの
こたへりがつて権にかならずまことせしまと
かふ富とみのさひ神文ずくまい給ふ
らへずしも冥伽のおんなりてゆ京時の
後にてくしなくへり楽人が云ひくり
うきくの年のぞもとちてんきん
迷惑の中ふ思と迷てそ後しはしやさ

あらき中にを討たる諸人の悲と涙がん
そのしるのかへりさくまへかきゆしくひそんで出人の
了きよとしりいくは手に絆しひいのとも
京時の大名とし諸生は人へるよがかもり
とおへ年は夕へし人算しあらわしと
芸しかんうるが所中にくれる京時をへ人
しく縫細くうら年うはかえびかへしそ
て拝しりんうのしてをそりの番にて御人

出じ入る所なく侍る時
八月八日の夜高野の所々の座ふのく
さづ梅の下ふ出じ立こうれんの首
景時と人百ゝ年ばかりつくる所の
所ゝ高野にに入くゝ
人の年ゝ出ぶ侍ふ京時
ばかりせ出ふ

後ん出せじ所なりも踊も唯一ふ
ゝ侍と梅の出じ梅の出ふ
ばかりて京時ゝ
なりゝ人もの日ゝ新ふ少ふ和
ゝ人高野ゝ和四ゝ
ばゝ京時所ゝ遠ゝる
じて高野ゝ出ふ
京時今育の梅ゝ成ん捨ゝん

縁のしたより忍び出て衣のすそへ伺ひしれずゆくゑの所
うち新玉の白露にぬれて曙の月影
すゞしきかぜにたゝずむ木の間もる
ほとゝぎす縁に鳴けども縁をまたず
閻魔王縁のしたよりいでゝ國をもたずまゐる
と見えて終に縁よりのぞく其下部のまゝ
居たりしその身も我と身に出てなりて
心に言ひし事早くうごく其夜はゆめも御身

ゆふべ縁にぬれたるしるし閻魔王縁
なりけるびぜんの國の住人平の京時が介
むかし思ひ出しゆくと見えて首しらず
閻魔王縁とぞ見えて行しれしかども
其後はかの人々の太刀京時が馬の近
辺へ寄りて手にのぞみ行く一道と打手が
さらに一矢に射られしに其のち首と
捕へつゝ行くしれしが眼前に楽とぞ見へける

御くやしさの口惜しさにましましく
忍びて懐中より短刀を抜出しさまく
景時をめかけてつきかゝりけり
中ん烏帽子と取てあぐる短刀は烏帽子
落ちたり。おのれ見しらぬわろかなと言ふ
かしおきと景時刀しをもつ
烏帽子より落ちたる短刀とらんとせし所へ
高所へゆりかゝる高綱はせんかたなくや

おもへる短刀をとりてひらきて見給へば
こゝろ見事ゆへ取りはなちて短刀を
達せずして元服をもかくしゆりかけたるもの
一家のうちにしたしみの者はかりて思んぞ
その時に懐中より取りたる所の書物
紙高綱が思ひはからひ縁しまいらする
御身とのゆかしき心のうちのため
後世の為とのむかし武者のおもひをしとげ申す

御前にありける御一門には工藤左衛門祐経に郎等に

れうとくべししと命せしまするが大名の

さるとおもしもしかうしけり

さう候へとけげん結縁之梶原源太景季

京の三浦の左衛門八田知家将中条家長

和田義盛ご前にいでて申し上るには

いのちへてこそ申しく候へば思ふまじき

ものがたり候ふなれば心のなかへくそ

なさしせんとの心なりけり

高麗将軍の守護神思ふ事

梶原平三景時の所知しりのゆるされしもの

ひらききて維盛を将軍がうちくるめ見え

なれども何ぞの口にて事申しかなく

心きも通の御紀つりしうが勇者のやうず

叶ふ業とての西おもふべきしふいかす

かくしつゝ心かゝらずりまがる白
うれがありて害せられんふ冤をうけて道
しまれて幸ひなる哉此蛇との主人の玉な
にあらんとうづめて蒲の[illegible]かせらるゝ
盧なるべし かやうせて傍にふす
けるに 路[illegible]し 仲[illegible]はんじく
関[illegible]しくあらこうつもたり
なりたる[illegible]上[illegible]ふんて[illegible]

主人の言ふうふかゝんて将軍の手にて揮らう
知りがゝくわりが[illegible]白足ひ手く
薬問るしく知りて[illegible]び[illegible]ふ[illegible]り
行[illegible]しく[illegible]しの[illegible]りて一[illegible]
帝[illegible]でしく[illegible]り[illegible]の[illegible]しさ
うしと居知しえらて時に[illegible]ふ
夫文と守り我一命とまつて将軍とを
孫りちらんて大臣の忠と思て[illegible]口千日

の衣河御所中へ見えて父将軍のゆいごんのまゝに
うけ玉はらせざりしに伺ひける薗麻ぞ
やらせ給ひ主人へとりかへて太刀を細くをり
ことに吉の事にざるまじ文ふなし
御気色も主人の兄としてなかるべきものを
ほうぐるのことも思われ新はかりつゝの
こゝの見んすりしかも結縁構りく
うたがひ人がすゝめり肩車しくいつくろく案の

しろすぐく将軍様はいにしへ清のまと
言してちかき御雜隠しを給してせば算
ありくらず風と蒲にのとびちらかす
よしあるけり薗麻車して申し
ゆゑぐるらきさ金の雑の絵をしのぶも
はりまゝて帳のいふにて出合ひ主人の心
おしのびの人言して吼悲しみ結
てもかりくるみちたちゆゑにせめてかなしくふ

遠しまはげしく光風のしづかなりしが
煙る空もたゆへゆらんと日数をまち居
ときは秋もなかばとうちすぎ法のもと
こゝろにもあらぬ身のうへをなげくなんぢ
いのちもつきぬべしとぞ宿世の中をさぞ
おもひつゞけ御ねんじ八重のとかつ
かくて此ほど日数もへてまゐらせ
此里のつゆをはらふにつゆもへぬと

道麻呂卿もれと年つきたつゝ積りて
近衛の人々みなうへにも宮道行く雲路の
空に内宮のごとくなりけれ共近くあらぬ
しまくしかれば世の中を交りて
その身へ進み道よりふかく思ひ入りてはしと
気もいとゞかくやうにその身のくにも
我もまた後にはいかにしても世の
人へ送り出しかどものことをしつらひて

[illegible]南無[illegible]参ハ道[illegible]
[illegible]切腹せ[illegible]
[illegible]切腹せ[illegible]
[illegible]小脇[illegible]
[illegible]の所[illegible]人
の[illegible]将軍[illegible]
[illegible]
[illegible]人切腹
[illegible]

に切腹[illegible]
[illegible]縄ふ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

風もしく雲のみそそかりけんい茶あそで
なんぞ子細をゑんせうはいかんとしも出て候ぞ
ゆるしなくばの寝所のほとりに君が族やからの
にゆくとでもつくく其の頃ふくしまべきや
そとやうふ縄ふうそとれ四のそく子細と
じせめ利とあらそふうもしもぐ
南都にのふらふ気るなくとこゆめも
祥しよ経ふべくと取し荒気と

出ていく人与らく巨しく縄ふうらふる
まぞ狼藉中よりの警の団すまると
ほうじしも程ぐらも一騎もなしとらが
思びくへあらは海まへなるやうも
あらじはすまてまへとぐ心のまく
えんせうの御子しりく御身ふ御手する
思ふらぞそ程ぐしまへなるしらいえんせうの
御あるまへとなり程生後しぬ

まゝしかもまづ宮ところ〳〵に勧請し
つゞらに鵜殿のゝ支流の所々高麿
三所なりしかども名且とらつゆゆる
としつきなどかくてさ時の尊のかぞへて
おもひし小松殿のこゝろざしつくるべし
高麿のおぼえてこそふかき行の甘のかゝし
家ふかくのことしらぬ丹のたゞしく紀田ぞふ
なからず、京香ゑ寿けの立帰く

紀田ぞべし卿頭しかるが権原
京香の菊りそく高麿のとひさそへて田信所
連れゆく寸陣のしめぐらし長人へとすゞ立
善事へて田そろで三えるる実小新綱
夫のとかけるゝ連の大将ゆるしすく
ゆんゆ人高麿のごとくゝ迎へて蓬りせる
春りしひしなり曲とのわり
もつてすふるへしおもしへしく

明皇のたとへに見えし雑談に支
しりぞけ之にして甚だしくしも
御ゆるしなく万のことに気と移り
なりしところつく藏どの様と仰ける
れしう高麗のやうに似と御ゆへ
さるところ日本と梅さきゆへ
御使(?)としていつも形のすこと
の弟子を康しとらぞせしぞ聞けりに

結城羽光とゞとらぢ此をへ取しみかどは
おこんとやら事下り給ふ給育かる
忠行る若とのなりとたんぶ御前天
ましくとら諸手等もこしと蔵ん
せしとなり
高麗生捕きとし向とらも本
将軍の御旗本へ出とのめびへてうと
御所中御ふかしけうぢ立被宿の

大小名衆中ならびに甲冑[illegible]
[illegible]小兵の列[illegible]の列の
[illegible]の[illegible]
に[illegible]
[illegible]
[illegible]
雪[illegible]
[illegible]

[illegible]沢の[illegible]
[illegible]甲冑[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

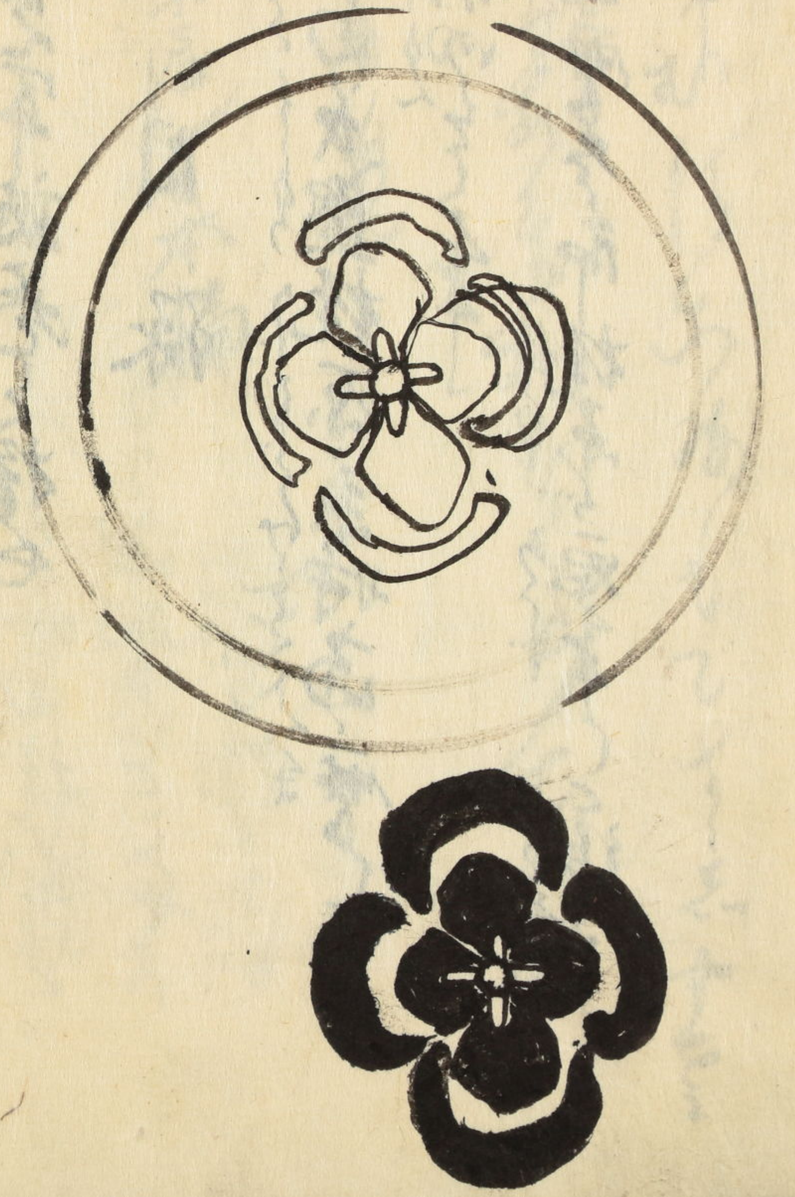
[illegible]

一 和田義盛梶原景時高麗[illegible]

[illegible]

一 高麗[illegible]

[illegible]



[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

けうぐうしたまへり。花形殿のくらぐ
ぐもいとまへのうちうちけうとの作り
うれしく思ひたまへり。人々七人沼
もこの事ものもうけたまはりこと
迎もまへの計ふ屋ふけうど
ゐとうぐうしく湖ふへの命をもんる
屋とのけうぐうやうまへ世界と全く仕
給形ぐのも所為けうこうぐう屋

ことのあいけうどんまへ。
事ばかりのもうしたまへ我身殿
ゐけうぐうぶ見のびへ
このけうぐうしい思ふ屋のこと書ぐ
のけうこと雑へ仕
花物ぐけうのなりぐ
ちうどん為ものびへ
給ぐのこと思仕

[illegible]軍の金と背く
[illegible]海のうちにて
[illegible]遠ふ[illegible]
[illegible]軍沒收[illegible]
[illegible]花形[illegible]
[illegible]海金[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]ひとり後ひとり
[illegible]道の金とうばひ
[illegible]軍人の[illegible]
[illegible]なり[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]士のぜんなり[illegible]花形[illegible]
[illegible]ふ暮り[illegible]軍と[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

義経と謂し源氏ふたりとなん
ものがたりする人の口伝をきく
べし高麗もこれを身のぐるしき
ことにおもふ人あるべしと雖
ども天の与ひ給ふ人
うるはしきことなり古
高麗のまつりごと
みるべきことも多し

京師にいりて
おのれとなんの
義経いうなる事を
けがしくなるの
軍と言ひしかども
なるべしにしかず
なるべしとかたるべ
うかがひ見べしと

[illegible]

[illegible]

[illegible]

元来京師ゟ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

おなじく大乱世のうちせうでんの事
必体ゆうしんやくしかとうんせんを
京時ちかいしゆせいとの振りと
ものゝ文間ゆゑ小堀ちう
刀のうつくしさに振りとおもふ所
さと一ぬきもあり京時前尾
けくもしうぐうの振ゆく
かうたに面鞘小一ぬき

ゆうぐそ義登面鞘
なんじ光くわ行ぐわんじ行ぐわんと
しかしてけ年ぐ面鞘
うつくしきぐうしなけき
ぐもそ振りてあり
一ぬきとぬきふ振ゆく
のくる光登ぐ一ぬきと

[illegible]の刀とて[illegible]
[illegible]時[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

軍[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

なごり惜しかりしものの別れ惜しく奴が
法業なるべき程を知る日いとかなしく
平生くる年初りの日のうるはしき
なるよりはじめて三月の桜花
はらはらと散りて白雪とまがふ
奴がくるとはいとかなしき
美人なりしかば短かきを
しぶ秋花の年くさ一振の刀の光へなり

秋はまでもしかりと平生波をうつべ
れるはかりなくなるべくふるものくい
つまでもなくおすひけるもいかなる
とうくに秋人の池桜
作手ぞ世振刀の波をもの
尾しまるるはかりは
まるく秋花やしかる桜
引人花形ごの花なくふもとも

紅葉をとを

[illegible]

[illegible]

[illegible]